

interview インタビュー

「津軽海峡冬景色」「時の流れに身をまかせ」…誰もが一度は耳にする歌謡曲の「ヒットメーカー」——作曲家の三木たかし氏にインタビューをお願いした。作曲の仕方を始め、名曲「津軽海峡冬景色」のエピソード、歌謡曲を取り巻く現在の状況、著作権問題等々、実に興味深いお話を伺った。

(聞き手：菊地裕太郎、中島美砂子)

プロフィール みき・たかし

東京都出身。1967年「恋はハートで」(作詞：なかにし礼、歌：泉アキ)で作曲家として本格的に活動開始。代表作として「津軽海峡冬景色」(1976年)、「思秋期」(1977年)、「めだかの兄妹」(1982年)、「つぐない」(1984年)、「時の流れに身をまかせ」(1986年)、「アンパンマンのマーチ」(1988年)、「夜桜お七」(1994年)など多数。最近、劇団四季の昭和の歴史三部作「ミュージカル李香蘭」などを作曲。歌手の黛ジュン氏は実妹。(社)日本作曲家協会理事長。

作曲家 三木たかしさん

——そもそも、作曲家になろうと思ったのはなぜですか。

自分でバンドを作ってギターを弾く方が楽しかったので、作曲家になろうとは思っていなかったのですが、若いころから、恋をしたり、それが終わったりしたときに、自分を慰めるために作曲するようになりました。

——曲はどのように考えるのですか。

よく乗り物に乗っているときに思いつきますね。景色を見ていても、食事をしていても、そのときにふっとメロディーが出てくると、すぐ五線紙に書きます。食事中でも紙のナプキンがあればそれに書き留めておきますね。

——「津軽海峡冬景色」を作曲したときのエピソードを教えてください。

この曲は、石川さゆりさんのオリジナルアルバムを作ろうということで、作詞家の阿久悠さんが、少女が恋をして1人の女性へと成長していく1年間というコンセ

プトを考え、その最後の12月の曲として作りました。すでに「津軽海峡冬景色」という題名が決まっていた、詞よりも曲を先に作るようになっていました。また、阿久さんからは「歌の最後は『津軽海峡冬景色』というフレーズで終わってほしい」と言われていました。

私は、若いころにバンドの演奏旅行で青函連絡船に乗って札幌へ行った帰りに雪がふぁーと降ってきた光景を思い浮かべ、そのときの想いが湧き出てきました。この曲は5分くらいでできましたね。まず歌のメロディーよりも「ダダダダーン」という激しいイントロが始めにできたのです。冬の津軽海峡の海の荒さ、寒さや凍るような感じ、もの哀しさを表現しました。

——そんなに早く作れるとは驚きです！

テレサ・テンさんの「時の流れに身をまかせ」も早く仕上がった曲ですね。どちらかというと、短時間で作曲したもの、一気に最後まで作りあげた曲はヒットしているような気がします。逆に、こうしよう、ああし



自分の好みではなく、カッコよさやファッションで音楽を聴くのはあまりに寂しい。最初は模倣でも、そうしていくうちに「自分」を出していくことが大切なのではないでしょうか。

ようと考え込んでしまった曲は、あまり皆さんに支持されないようです。自分としてはいい曲だなあと思っているのですが（笑）。

——「この曲は売れる」という感触はわかりますか。

うーん、わからないですね（と首を傾げて考え込む）。歌う人のパワーとか、プロモートするレコード会社やプロダクションの力などいろいろな条件が合わさったときにヒットする確率が高くなりますね。でも、あまりプロモートしないで大衆からジワジワとヒットしていく曲もあります。過去のデータをコンピュータで分析して予想しても、それが本当にヒットするかはわからない。音楽の世界は実に不思議です。また、今はテレビの歌番組もない状況で、プロモートする場がないから、なかなか皆さんに歌を知ってもらう機会がありません。プロモートについてはレコード会社やプロダクションも悩んでいるのではないのでしょうか。

——以前はテレビの歌番組で歌を覚えたりしましたが、今はこうした番組が少ないですね。

民放の場合は、視聴率が取れないからでしょうね。また、なかなかスポンサーもつかないのでしょう。ですから、私は、有料のペイテレビが普及して、「歌謡曲専用チャンネル」のようなものを作ればいいのではないかなと思っているのです。歌謡曲が好きな人はそれを見るでしょうから。

——今後、歌謡界はどのような方向に動いていくのでしょうか。

なかなか難しいですね。美しさやもの哀しさが感じられるようなメロディーの枠組みはもう出尽くしてしまったと思います。今まだ出てきていない新しい感性の音を見つけられない限り、歌謡曲は煮つまってくるのではないのでしょうか。

——最近の若い人が聴いたり、作ったりしている曲について、どのようにお考えですか。

今の若者が50歳くらいになったときに、やはり青春時代に聴いた歌を歌うのではないかと思います。私たちが作った歌謡曲が残る保証もないですね。若者の心

をつかんでいるのかという危機感は強く持っていなければなりません。

でも、若者みんなが、自分の本当の好みで今の音楽を支持しているかと言えば、必ずしもそうではないと思います。また、サラリーマンがカラオケで新しい曲を歌っているのを見かけますが、あれは無理してますね。自分の好みではなく、カッコよさやファッションで、例えばアメリカの音楽を聴いたりしているのはあまりにも寂しいことです。そういう意味では、ナショナルティがないともいえますね。最初は、アメリカの音楽を模倣してもいいのです。しかし、そのうち、模倣では飽き足らなくなるのが怖いのです。模倣していくうちに、「自分」を出していくことが大切なのではないのでしょうか。

でも、最近は、津軽三味線を弾く若者が出てくるなど、いろいろな動きもあるようですから、あと10年くらい経ったら、音楽の世界も面白くなるでしょうね。それまで、頭や心が古くならないようにしたいですね。

——インターネットで音楽が配信されるようになり、新しい著作権の問題が多く発生していますが、どのように思われますか。

個人による無断録音やカラオケの問題などもありましたが、今まで予測できなかった問題が発生しています。法の規制が後からついてくるような感じですが。音楽は私たち作曲家にとっては「財産」ですから守っていききたい。弁護士さんにいろいろと知恵をお借りしたいですね。

——是非お力になりたいと思います。お忙しいところ、ありがとうございます。

（構成：菊地裕太郎、中島美砂子）